

# 地域学習と学校図書館

——学校図書館における地域の調べ学習の具体的事例——

藤 森 馨

## 第1 年中行事や地域を調べる意義

年中行事や地域学習の重要性については、これまで社会科の枠組みの中で指摘されてきた。しかし、国際化が進み、相互理解の必要性が高まった今日、自分自身を知り、第三者に説明するといった視点からも、その意義を増している。

地名を通じての地域学習などの意義について谷川彰英氏は、早くに、

地名を使った歴史教育の一番のメリットは、普通の通史では、過去は過去、今は今というふうに、切り離して考えてしまうのですが、地名を使いますと、過去のことが現在につながっているということが、実にリアルに把握できるわけです。

と述べられ、さらに、社会科の授業を展開する上での利点について、

地名を活用することによって、社会科の授業の一面が極めて明確に描けること、そして何よりも大切なのは、新しい教材を発掘して授業を構想していくことによって、社会科の授業に活力を生み出していくことである。

と、指摘されている（『地名に学ぶ一身近な歴史を見つめる授業一』黎明書房 昭和59年）。歴史を過去の問題とのみ把握せず、今日にまで連続するものと認識させ、地域を、時間を超越して考察することによって、現在の社会問題を再考させ、社会科教材を発掘していくという。こうした谷川氏の見解は、その後広く支持され、現場にも導入されるようになってきた。

平成11年度の小学校・中学校・高等学校の学習指導要領にも、年中行事や地域学習の意義が規定されており、そのいくつかを見てみると、現行の『小学校学習指導要領』第2章第2節第2の〔第3学年及び第4学年〕の内容に、

地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。

ア 古くから残る暮らしにかかわる道具、それを使っていたころの暮らしの様子

イ 地域に残る文化財や年中行事

ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例

とあり、具体的にはア～ウのような点について学習するとしている。中学校では地理的分野及び歴史的分野に関連項目が見られ、高校では日本史A・Bに、それ

それ関連項目が置かれている。高校の日本史Bでは、

外来文化などとの接触や交流による文化の変容や発展の過程などに着目させ、我が国の文化と伝統の特色とそれを形成した様々な要因を総合的に考察させるようにすること。また、生活文化については、時代の特色や地域社会の有様などに関連づけるとともに、民俗学などの成果に基づきその具体的な様相を把握させること。

と、伝統文化については外来文化との接触を視野に入れる点、生活文化については、時代の特色や具体的な地域社会のありさまなどに関連づけ、さらに民俗学の成果をも援用し、理解させるとしており、地域学習が単なる地域にとどまらず、外来文化や日本及び世界の歴史など、大きな視点と関連させて行われる必要があるとしている。

このような視点は極めて重要で、特殊なことを考えられてきたことが、実は世界的な広がりを持っていたり、反対に普遍的なことであろうと思われていたことが、極めて特殊なことであるということが、地域文化には多く見られる。

それでは、こうした児童・生徒の地域学習に、図書館・学校図書館は、如何に対応しているのだろうか。実は、三澤勝己氏が、

地域学習のための資料が、学校図書館に十分に備えられているかという点、必ずしもそうではないのが現状ではなかろうか。

と、端的に指摘されているように、調べ学習に必要なレファレンスブックが不十分であるのが現状であり、環境が整備されているとは、決していえない状況なのである（「地域史資料の収集と学校図書館—中学校社会科の地域学習を対象として—」（『図書館雑誌』vol.98 no.7 2004年）。なお、この点については1999年に日本図書館協会が発行した『地域資料入門』の中で、第1章では根本彰氏が、第4章では荒井敏行氏が、若干ではあるが、ほぼ同様の見解を開陳されている。地域学習のためのレファレンスブックが不十分であることは、図書館・学校図書館関係者が等しく痛感しているところといえよう。

さて、レファレンスブックが不十分な上に、レファレンスブックを利用した事例研究の参考書となると、管見に及んだものはほとんどない。具体的な授業展開の報告などを除き、辞典・事典・年表などの属性や利用方法にのみ終始しているものがほとんどである。どのレファレンスブックが、具体的にどのような問題を調べる時に有効であるかは、授業展開などの事例をなるべく多く蓄積するしかないが、授業展開の報告書は、どうしてもある特定地域に偏ってしまうという傾向がある。できれば、普遍的に利用できる事例研究が、望まれる。

そこで、本稿では年中行事の中の正月行事を取り上げ、調べるためのレファレンス・ツールを紹介し、それを利用しつつ、具体的な問題を設定し、それを解決する調べ学習を展開し、事例研究の試案を作製してみたい。

## 第2 年中行事を調べる

ここでは、年中行事の中でも、一年の始まりである正月行事について調べ学習を展開してみたい。正月行事は多くの人々が関わりを持つが、その関わり方は地域や世代によってさまざま。また、正月行事は古来より変わることなく連綿と続いてきた、と考えられがちであるが、時代によりかなり変容してきている。こうしたことを調べ学習を通じて、児童生徒に考えさせ、とかく一面的になりやすい理解を、多面的に理解させてみたい。

さて、こうした調べ学習に際して、レファレンス・ツールは何を使用すればよいのだろうか。小学生・中学生向きとしては、『どの本で調べるか』（図書館資料研究会編 リブリオ出版 1997年）がアイウエオ順に項目が配列しており、検索に便利である。「正月」や「年中行事」を引けば、関係のレファレンス・ツールが多数記載されている。高校生には、成人向けの『日本の参考図書』第4版（日本図書館協会日本の参考図書編集委員会編 日本図書館協会 2002年）及び『辞書の図書館』（清久尚美編 駿河台出版 2002年）を、図書館利用教育の上からも薦めたい。

### （A）お正月を調べる

小学生（3・4年生）には、家庭や身近な地域の正月を考えさせてみたい。小学生にとって正月の楽しみといえば、つい最近までは、ご馳走やお年玉、そして独楽回しや、凧揚げなどの遊びであった。しかし、急速な近代化が進む中で、伝統的な正月遊びは衰退しており、今日では、正月の楽しみといえば、お年玉ぐらいなものではなからうか。このお年玉とお雑煮のお餅とが、実は切っても切れない関係にある。お年玉は、もともと正月についた餅をたくさんのお餅にして、人々に配ったのが起源であるといわれている。この餅は、正月の神様である年神を祭ったお供物とも、また年神そのものともいわれるが、いずれにしろ正月の神様からの贈り物である。会食する雑煮餅と一人一人に配られるお年玉とは、その性格を異にするとはいいいながら、正月神と深い関わりがある（『民俗の事典』岩崎美術社 1977年）・（『総合百科事典ポプラディア』ポプラ社 2002年）。こうした話を導入とし、一般的な正月行事を、先ず児童に図書館で調べさせる。ただし、小学生であるので、調べ学習に使用する図書資料は、あらかじめ準備しておき、教師とともに資料を見ながら、調べを進める。

六〇

課題：お正月について、図書館で調べてみましょう。なぜ、お正月には「おめでとうございます」とあいさつするのでしょうか。なぜ、門松をたてたり、ご馳走を食べたりするのでしょうか。

一般のお正月については、なぜお正月のあいさつが日常とは違い「おめでと

うございます」なのか、ということについて考えさせてみたい。日本の祭事暦を調べてみると、古くは、その年の豊年を願う豊年祈願祭にはじまり、穀物の収穫を祝う収穫祭に終わっていた。まだ、冬の時期である太陽暦の今日では、正月を新春というのは違和感がある。しかし、一年を355日とし、閏月をもうけて日にちを調整していた昔の太陰太陽暦の時代では、正月は今より一月以上遅く、生き物が誕生したり、活動を開始する芽吹きのことであった。「めでたい」は芽が出るから来たものであるということを感じさせよう。こうしたことについては、『日本の年中行事百科1 正月 民具で見る日本人の暮らしQ&A』（河出書房新社 1997年）・『総合百科事典ポプラディア』・『日本の祭りと芸能 [1]』（小峰書店 1995年）・『1 がつどんなつき…堅牢版こどもの12かげつ・1』（小峰書店 1981年）などが、参考となる。これらは何れも、難しい漢字にはルビが付され、写真や図版でわかりやすく解説されている。『総合百科事典ポプラディア』は事典のため、簡単な記述であるが、正月というものをおおよそ理解するには便利である。『日本の年中行事百科1 正月 民具で見る日本の暮らしQ&A』は、民俗学の視点から、年徳神・歳徳神・正月様ともいわれる正月の来訪神である年神を中心にすえて記述しており、年末から年始にかけて連続するさまざまな正月行事がわかりやすい。すす払いや大掃除は、年神を迎えるために行うものであり、門松は年神の依り代として立て、注連縄はそこが清浄なところであることを示すものであるということを理解させる。こうした行事の意味は、同書の「年末に大掃除をするのはなぜ」・「門松を立てるのはなんのため」・「注連縄はなにかの目印」などを読むことで理解できる。最近都市部の住宅地では、門松を立てたり、注連縄を張ったりすることは、少なくなったといわれている。しかし、商店街や農村などではまだ多く散見する。したがって、このあたりのことに関しては、児童も実際に見ていることが多く、図書館資料によって確認すれば、その意味を容易に理解できよう。問題は、お節料理や雑煮であるが、こうしたご馳走を食べる家、食べない家が、最近あるという。そこで、一応お節料理やお雑煮についても、図書館資料で確認させる必要がある。お正月にお雑煮を食べるということについては、『1 がつどんなつき…堅牢版こどもの12かげつ・1』の「あけましておめでとう」に、

かんじつの あさは かぞくそろって、「あけまして、おめでとう ございます。」と あいさつをします。そして おぞうにをたべます。

五  
九

と書かれてあり、かがみもち、だいだい、こぶ、くろまめ、たづくり、かずのこ、おぞうに、などを何でお正月に食べるのかが、簡単に記されている。小学校低学年向きであるため、雑煮については「としがみさまと おなじものをたべて ちからが つくように。」と、極めて簡潔に記されているが、もう少し詳しく調べるならば、『日本の年中行事百科1 正月 民具で見る日本の暮らしQ&A』の「雑煮や屠蘇の作り方は」に、

正月の代表的な食べ物の雑煮は、本来は大晦日の日暮れから年棚に供えてあ

った家族めいめいの餅やお供え物、お節料理の残りを全部一緒にして煮たものでした。現代の感覚では、新年からどうして残り物が入った雑煮を食べるのか、不思議な気がしますね。

雑煮のことをノウレイと呼ぶ地方もありますが、これは、神事が終わってから神に供えてあったお神酒や神饌を皆でいただく宴を「直会」といったことからきた言葉です。人々は、神と人がおなじ食べ物を食べることによって、神から力を授かると考えたのです。ですから、雑煮をいただくことは、神と一緒に会食する大切な儀式と考えられていたのでしょう。

と出ており、お節料理も、お雑煮も、神人共食することに目的のある大切な儀式にはじまっていることがわかる。ところで、お雑煮には餅が入れているが、この餅が古くは年神そのもの、もしくは年神の力と考えられていた。また、お雑煮の具も、元来おいしいから入れられたものではなく、一つ一つ意味があった。

#### (イ) お雑煮を調べてみよう

課題：みんなの家のお雑煮には、どんな形のお餅が入っていますか。また、どんな具が入っていて、どういう調味料が使われていますか。お父さんやお母さん、お祖父ちゃんやお祖母ちゃんに聞いてみましょう。

このお雑煮に関する調べ学習は、思わぬ反響を呼ぶ。かつて、東京都内のある公立学校で、学年を縦割りにして、お雑煮を作るという単元が行われた。その時、餅の形が丸いとか、四角いとかというレベルを超えて、具には、椎茸などの山のものを入れるべきか、牛蒡や里芋・人参・大根などの根のものを入れるべきか、あるいは海産物に限るべきだとか、様々な意見が出された。また、汁は、味噌仕立てにするべきだとか、すまし汁を用いるべきだとか、実にさまざまな各人各様のお雑煮観が展開され、それぞれのお雑煮こそが代表的なお雑煮と主張して譲らず、混乱したことがあるという。こうした各家庭での様々なバリエーションあふれるお雑煮を児童に報告させることに、この課題の目的がある。お雑煮には、その作り手を育んだ文化が凝縮されているのだ。

今関東に住んでいるからとか、関西に住んでいるから、ということでお雑煮も関東風であるとか、関西風であるとは、限らない。お雑煮の地域の特徴について、概観してみよう。お餅の形から見てみると、お雑煮に入れる餅が四角いのは、関東及び中部地方の特徴である。一方、円餅は関西以西いわゆる西国地方の特徴である。汁は、すまし汁か、味噌汁か、小豆汁、おおよそ三系統に分類されるといわれている。味噌汁は京都系統といわれ、京都ではテレビなどでよく紹介されるように白味噌が用いられる。すまし汁は、関東・中国・九州地方に広く分布し、昆布出汁や海鰻出汁など土地々々によって様々だ。小豆雑煮は九州の一部や山陽・山陰の海岸地域に見られる。さらに、具も宮中の歯固めから起こったと考えられる大根や、芋頭を入れるなど実に色々である。児童の家の雑煮は、どんなも

のであろうか。いつ頃から、今のようなお雑煮を作っているものであろうか。お祖父さんやお祖母さんの話や親戚の人の話を聞いてみるのも有効であろう。また、交通手段が発達した現在ほど、人々の移住が多い時代もない。特に、東京やそれ以外の地方都市でも、古くからそこに住んでいるという人々はまれである。そこで、地域の古老に、その地域のお雑煮の特色を聞いてみるのも重要なことといえよう。また、郷土資料館や博物館などで調べてみたり、低学年では難しいかもしれないが、教員が各自治体史の民俗の項目を調べ、児童にわかりやすく報告することも必要であろう。右のような点に注目して、児童の各家庭の文化が西日本の文化なのか、東日本の文化なのか、考えさせてみよう。きっと思わぬ発見があるに違いない。

(ロ) お年玉って何？

既述のように、お年玉は、お供え餅や雑煮の餅と同様、正月の神である歳徳神や年神と密接な関係にあるが、どうして、そうした餅を配ったり、お金を上げたりするのであろうか。児童に考えさせてみよう。

課題：皆さんは、お正月にお年玉をもらいましたか。なぜ、お年玉をお正月にもらうのでしょうか。今まで勉強したお餅のことと一緒に、調べてみましょう。

まず百科事典から見てみよう。『総合百科事典 ポプラディア』の「おとしだま」の項を見てみると、

正月にこどもがおとなからもらうお金。「年神さまからあたえられる魂」からきたことばとされる。昔は新年を祝って贈る、目上の人から目下の人への贈り物すべてをさした。室町時代末には、公家の間でいろいろな品物がやりとりされていた。近世になると武士は太刀、商人は扇子、医者丸薬など、それぞれの職業から品物を贈る習慣となった。その後、贈られる品物は、全国的にもちが中心となったが、しだいに現金を贈るようになった。子供にお年玉を与える習慣には、子供を福の神とみたと、これにほどこしをすると幸せなことがあるという考えがあり、「年の賜物」が語源とする説もある。

とある。ところで、ここにはお年玉について、今日の事例が冒頭に記され、次に「年神さまからあたえられる魂」とある一方、室町時代以降の餅以外の新年の贈物の事例を挙げ、「その後、贈られる品物は、全国的にもちが中心となった」と、餅は種々の贈物が収斂された結果、という矛盾した記述が見られる。また、「子供にお年玉を与える習慣には、子供を福の神とみたと、これにほどこしをすると幸せなことがあるという考えがあり」と、本来福の神的性格を持つ歳徳神から子供に配られるはずのお年玉が、反対に子供を福の神と見立て、それへの贈物と逆転した記述も見られる。こうした記述は、児童を混乱させるようにも思われるが、さまざまな見解があることを理解させ、さらなる調べ学習への導入にとらえたい。

つまり、百科事典のみを見て学習を終了させず、他のレファレンスブックへと誘う必要があろう。低学年にも配慮してある『学習に役立つものしり事典 1月』（小峰書店 1990年）には、

お年玉はトシ神様からいただく新しい魂（お年魂）のことでした。お年玉の習慣は室町時代にもあったらしく、男の子にはけまりの道具、女の子には羽子板をあたえたという記録が残っています。

とあり、お年玉は元来、年神からのたまわりものと見え、室町時代頃にはけまりの道具や羽子板が配られるようになったとある。両レファレンスブックの記述は類似しているが、児童には両書に共通する「年神さまからあたえられる魂」という点を確認させたい。その上で、民俗学の成果も多く反映している『お年玉のはじまり いろいろな風俗・習慣』（『もののはじまりシリーズ』7 ポプラ社 1990年）の、

いまお年玉というと、お金をもらうことが多いですね。でもはじめのころのお年玉は、お金ではなく、おもちでした。…中略…一年のさいごの日、おおみそかに、神さまがやってきて、ひとりにひとつ、年をくばります。それをかたちにしたものが、おもちだったのです。おもちのほかに、おうぎもつかわれました。

という記述に注目させたい。本来が正月神である年神からの賜り物の魂が、餅という形で認識され、それらを配られることにより、一つ年をとると観念されていたことを、児童に理解させたい。こうしたことを踏まえた上で、それぞれの家でのお年玉や、地域のそうした習慣を地域資料から学習させれば、お年玉は単に大人や目上からもらう金銭ではなく、古くは、年神からいただく生命そのものであったことが理解できるようになるであろう。

#### （B）正月を調べる

高校生には、正月の意義や歴史を考えさせる。国際化が進む今日、我が国独特と考えられがちな正月行事が、東アジアに起因するものが多いことを考えさせ、さらに様々な文化を内包していることを調べさせたい。

課題：正月の行事や、その歴史について考えてみよう。

まず、正月は、我が国に1年を12ヶ月に区分する暦が輸入されて以降はじまったことを理解させる。暦の理解のためには日本史小百科シリーズの『暦』（広瀬秀雄著 昭和53年 近藤出版社）や『生活文化歳事史』第1巻（半澤敏郎著 1990年 東京書籍株式会社）が役に立つ。我が国の暦が、前近代には月の満ち欠けを以て1月とし、19年に7回閏月を置いて調整する太陰太陽暦であったことを調べさせる。こうした暦も実は中国から伝来したもので、事実かどうかは定かではないが、『魏志』倭人伝の注によれば、日本人は3世紀頃には春耕・秋収で一年を

知っていたらしいことを確認させる。

正月行事といえば、古代の宮廷行事に淵源するものが多い。そこで、『日本年中行事事典』（鈴木棠三著 昭和52年 角川書店）の正月の項を見てみると四方拝・朝賀・節会など様々な行事を見ることができる。こうした行事の中で、外国の行事に淵源するもの、また今日の一般の正月行事でも行われているものなどを調べさせる。四方拝も、朝賀も、また節会も、何れもが中国の儀式に淵源するものであり、今日の正月の晴れの膳を飾るお屠蘇やお雑煮も、中国文化の影響を受けていることを調べさせたい。『年中行事の歴史学』（遠藤元男・山中裕著 昭和56年 弘文堂）は、年中行事の研究手法や国際交流について触れられており、こうした問題を調べるのに便利である。『平安朝の年中行事』（山中裕著 昭和47年 塙書房）・『有職故実』（石村貞吉著 昭和62年 講談社）も宮廷の正月行事については参考となる。また、その出典や史料から年中行事を考えさせる時には、『年中行事御障子文注解』（甲田俊雄著 昭和51年 統群書類従完成会）や前掲『生活文化歳事史』が役立つ。

ところで、雑煮は、(A)「お正月を調べる」で見たように、宮廷行事の影響はあるものの、古来から続く歳神祭の神と人とが共食する直会の料理である。雑煮の中に入れられる餅やさまざまな具は、色々な意味を持っている。これを探ると、一元論的にとられやすい日本文化が、実はさまざまな要素を持つ複合文化であることが理解される。小学生の場合には、家庭や地域の餅の扱い方や雑煮の実態を調べさせることで、バリエーションの豊富さを理解させたが、高校生には今ひとつ踏み込んで、餅や雑煮の持っている意味について考えさせたい。このような問題を調べるには、『読む・知る・愉しむ民俗学がわかる事典』（新谷尚紀編著 1991年 日本実業出版社）が役立つ。本書は、単なる事項説明や解説ではなく、項目ごとに関連性があり、読み物になっている。また、参考文献や出典も明示されており、調べ学習を次々に展開するには最適である。

課題：なぜ正月に餅を食べるのか。また、餅は正月には必ず食べなければならないのであろうか。

この課題に対して、前掲書には「正月にはなぜ、餅をたべるのか」という項目がある。ここには、

五五

正月になぜ餅を食べるのかという疑問に関しては、すでに平安時代の書物に、餅は「福ノ源ナレバ、福ノ神サリケル故ニ衰エケルニコソ、福ノ軀ナレバ年始ニモテナスベシ」と記されている。餅は福の源であり福神であるという。二人が向かい合って餅を引っ張り合うことを福引きというのもそれと深い関連があり、正月の鏡餅は福をもたらず福神と考えられていたようである。

と、餅は福の源であり、福神であることが簡明に記されている。ところで、餅に関する記述はこれだけではない。餅を拒否する地域があることも紹介している。



このように、餅は正月に不可欠の食物であり、誰でも正月には餅の入った雑煮を食べるものと考えている。しかし、そのような中であって、正月に餅をつかず食べず供えずという禁忌を継承している家や一族が全国各地に点在している。この正月餅禁忌伝承は、民俗学では「餅なし正月」と呼ばれる。

この餅なし正月について、事典の記述はさらに進み、

餅なし正月を研究した坪井洋文は、稲作としての餅とそれに対する畑作としての芋や雑穀の存在に光を当て、稲作文化論一元論に対して畑作文化の存在を主張した独自の日本文化論を提示した。

と、稲作文化を基幹とすると、とかく一元論的に考えられがちな日本文化が、実は畑作文化を基層部に持っているとある。この事典に見える坪井洋文の著書『稲を選んだ日本人—民俗的思考の世界—』（1982年 未来社）によれば、餅なし正月を行う家や一族・村落は、北は東北地方から南は九州北部まで、全国的に分布しており、餅正月を行う家もしくは一族は、イモを拒否しないが、イモ正月を行う人々は餅を拒否するという顕著な傾向があるという。高校生に、こうした視点があることを理解させ、さらに民俗学事典・年中行事事典などの参考文献や自治体史などから、それぞれの地域の特徴や意味付けなどを調べさせてみたい。餅なし正月に食べるイモの種類、たとえば山芋と里芋のどちらであるのか。その違いはどうして発生したのか。調べ学習はさまざまに展開するであろう。

ところで、壇ノ浦で源氏に破れた平家の末裔伝説やその他の落人伝説を持つ地域と、餅なし正月を伝える地域は、重なり合う場合が多い。そこで、平家の末裔伝説や落人伝説を畑作農耕文化という視点から調べさせてみてはどうだろうか。きっと、新たな発見があるに違いない。里の人々とは異なるこうした人々の間には、餅や米のために災難にあったとか、卵を食べないとか、稲作農耕文化では理解できない不思議な伝説や行事を伝えている場合が多い。ちなみに、平家の落人伝説や、米のとぎ汁を流したことから追っ手に発見され非業の死を遂げたという源有綱の悲しい伝説を伝える栃木県那須郡塩原町に近い西那須野町のある地域には、餅なし正月を今日まで続けている家がある。その中のある家では、正月に餅の代わり五つの里芋を一尺足らずの竹に串刺しにして炉端で焼いて食する。しかしながら、その地域の全部の家々が、同じようにしているとは限らないという。このような伝承や行事は、ある特定地域だけではなく、東京23区をはじめ全国的に報告されている。郷土資料や自治体史の民俗の項目を調べることで、学習は進展するに違いない。

五四

こうした正月行事の意味は、その家に生まれた人でも今日となってはわからなくなっている場合が多い。ひっそりと行われる家々の正月行事の中に、文字では伝わらない遠い過去の記憶が凝縮されている場合があることを生徒には理解させ、都市化の中で急速に失われつつある民俗行事の重要性を気づかせたい。

### 第3 今後の課題

上記のように、小学生・高校生（もちろん、中学生も）に「正月行事」という課題で、指導要領を前提に調べ学習を展開させることはできるが、ここに提示した試案は、あくまでも全国を対象とした普遍的なレファレンスブックを利用したものである。児童・生徒の居住する地域では、試案に合致する事例もあろうが、合致しない事例もあろうかと思われる。学齢が進めば、進むほど、そうした感想を抱くに相違ない。やはり、地域学習には地域資料を調査しなければ、解決を見ないものが多い。しかしながら、レファレンスブックを調べるためのツールである『どの本で調べるか』を見てみても、たとえば東京都八王子市に関する地域資料は見るができるが、隣接する自治体のものは見ることはできない。つまり、掲載事項に偏倚があるのが実態だ。何故、こうした事態が惹起されるのであろうか。林容子氏が、『『総合的な学習に」司書教諭はどう関わるか』2.2「郷土資料の収集と活用」（全国学校図書館協議会 2002年）の中で、

図書館には、総合的な学習や調べ学習を進めていく際必要な地域資料や各種のパンフレット、冊子などをそろえておくことが大切である。自治体の発行するパンフレットや統計資料などは、学校に届けられることがある。また、これらは市役所や公民館などに出かけたとき、手に入れることもできる。自治体日より（広報誌）は表紙をつけて、ファイルしておくといよい。

と言及されているように、地域資料はパンフレット類が多く、まとまった資料集が少ないことに起因しているものと考えられる。小学生の場合は、パンフレット類をファイルしたものでよいかもしれない。しかし、中学生や高校生になるとこれでは物足りない。

ところで、各自治体が編纂した自治体史には、必ず古文書・記録を翻刻した資料編がある。中には、資料集のみを単独刊行し続けている自治体もある。学齢の高い生徒には、こうしたものも参考にさせたいが、漢文で記述されたものがほとんどで、中高生が縦横に活用するには無理がある。また、土地の古老の口承資料もあるが、戦前のものなどは旧字体・旧仮名遣いで、これもまた、現在の生徒が読解するのは困難である。そこで、司書教諭は、こうした資料を書き下し、対訳を作製し、生徒に提供する必要があるように思われる。何も教諭のみで、こうした作業を行う必要はない。生徒を積極的に参加させることもよいであろう。すなわち、今後の地域学習の進展は、こうした地域資料の発掘や作成の是非に関係しているように推察される。

（中国語・中国文学専攻：助教授）